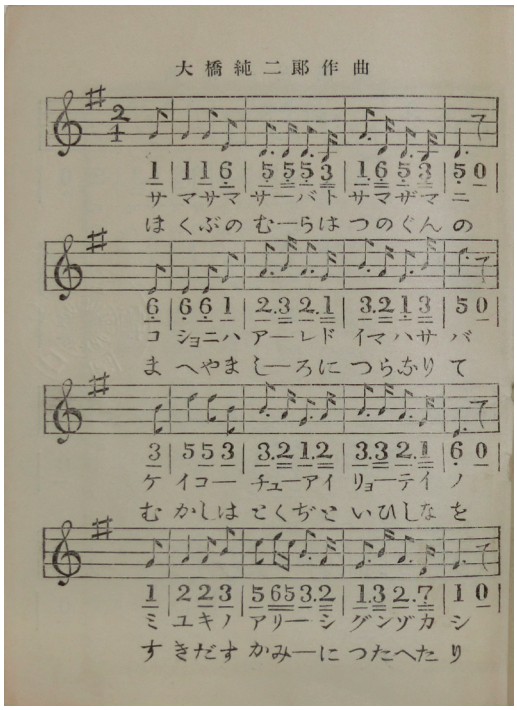

文書館 レキシノオト

「音」で読み解く
防長の歴史

♪10

「地理歴史防長唱歌　第弐集」（文書館図書767）

生活ノオト②

地理歴史防長唱歌（明治34･36年）

【防長唱歌】

『地理歴史防長唱歌』は、山口県内各地の歴史、地理を歌詞に取り入れた唱歌です。裏面にその一部を示していますが、まず県全体の概要を歌詞にし、続いて大島郡、玖珂郡、熊毛郡･･････という順で郡別に詞を作り、各郡の様子を紹介しています。各地の地理（山･川･港･海岸など）、寺社･駅･産業や産物、重要な史跡、地域の歴史などが端的に、かつリズミカルに歌われているのです。

本書は、県全体と大島･玖珂･熊毛･都濃郡を扱う第１集が明治34年(1901）１月、佐波･吉敷･厚狭･美祢郡を扱う第2集が明治36年1月に刊行されています（発行は徳山町維新堂書店）。豊浦･大津･阿武各郡と下関市を扱う第３集は、第2集刊行時に「近刊」とされていますが、実際刊行されたかは不明です。

明治34年2月14日の「防長新聞」掲載の「防長唱歌」の広告には、「一唱の中に知らす識らす防長の地理歴史を記臆することを得べし、以て唱歌教科書とすべく、以て郷土地理歴史参考書とすべく、又以て旅行案内とすべし」とあります。

「防長唱歌」第１集は県立山口図書館、第２集は当館が所蔵しています。県内図書館や個人宅で保存されているものもあるかもしれません（たとえば年光保秀「郷土歌『防長唱歌･都濃郡の部』」『徳山地方郷土史研究』7参照）。

「汽笛一声新橋を」で知られる「鉄道唱歌」が出来るのが明治33年5月。明治30 ～ 40年代、各地でたくさんの地理教育唱歌が作られました。鉄道唱歌のほか、郷土を歌った郷土唱歌や、日本全体、世界･外国を歌った唱歌もありました。「防長唱歌」は郷土唱歌と呼ばれるタイプのものです。明治期の唱歌を集めた『唱歌教材目録（明治編）』（国立音楽大学編）にも未収録のようです（参考：山口幸男「明治期における地理教育唱歌について」）。

【作詞者富田武一】

「防長唱歌」の作詞者は、徳山中学校教諭富田武一、作曲者は山口県師範学校教諭大橋純二郎です。第２集には都濃郡戸田村立桜田高等小学校校長淺田五一作曲の楽譜も掲載されています。

富田武一（『岩国高等学校九十年史』より引用）

「防長唱歌」作詞者の富田武一には以下のような著作物もあります。

①「大日本歴史地図」／明治 28 年刊。

②「新撰假名遣捷径（しんせんかなずかいしょうけい）」（近藤文庫 196）／明治 29 年 12 月刊／仮名文字の使い方の解説書。

③「瀧鶴臺先生及び其の家庭」（県立山口図書館蔵）／大正 7 年刊／山口県美祢郡教育会編。

富田は、明治28年8月、山口中学校徳山分校に教諭として赴任し、同33年4月同校が徳山中学校となると、大正5年（1916）11月まで同校に勤務しています。徳山中学離任後、大正8年5月まで岩国高等女学校の校長兼教諭、そののち15年4月までは豊浦郡立豊浦高等女学校（のち山口県立長府高等女学校）の校長兼教諭を務めています。岩国高女では運動会の開催や校旗・校歌の制定、豊浦高女でも校歌・校旗・校章の制定や洋服の制服の採用など、大きな業績を残した校長として高く評価されています。豊浦高女では精神教育・情操教育の一環として小林一郎「こころの力」（成蹊出版発行）による指導を行い、毎朝そのレコードを聴かせたといいます（参考：『山口県立徳山高等学校百年史』『岩国高等学校九十年史』『長府高等学校六十年史』）。

富田は豊浦高女退職後、大正15年4月より東京で公爵毛利家特別職員となり、両公伝編纂事業（幕末維新期の毛利家当主敬親・元徳の伝記編纂事業）に従事し、伝記執筆を担当しましたが（毛利家文庫19日記64「記録課日記」）、昭和7年に亡くなっています。

富田は、徳山中学では国語・漢文・作文・修身などを担当する教諭でしたが、歴史地理に関する著作（コラム参照）もあり、晩年には両公伝編纂に関わるなど、歴史や地理にも深い知識をもった人物でした。若い頃、近藤清石に就いて国学・歌道を修め、一時東京の国学院でも学んでいます。また、岩国・豊浦両高女で校歌制定に尽力したように、学校教育における音楽の重要性も強く認識していた人だったかもしれません。

作曲者の大橋純二郎は、京都出身、明治32年2月～33年12月、県師範学校の助教諭を務めた音楽教師です。同29年8月、県師範学校に東京音楽学校卒の元橋義敦が初の音楽専門家として赴任しました。この元橋の後に赴任したのが大橋でした。のち、静岡県師範学校に転任しています（参考：梶田清七『山口発信　唱歌の航跡』）。

♪『防長唱歌』（一部）

第一　防長

一 大和島根の西の方 山陽道のはたてなる 周防長門の二国（ふたこく）のその地勢（くにがた）の雄々しさよ
二 東芸州石州の 境をなせる山脈は 八重垣なして久方の 雲井に高く聳えたり
三 鯨潮ふく日本海 浪立ちさわぐ響灘 北と西とを取りまきて 南は周防の灘ぞかし
四 東西三十九里余 南北三十里あまりにて 面積三百八十有五方里ばかりなりとかや
五 北部もさのみ寒からず 南部も甚だ暑からず 天変地異は多からず 痩せたる土地は少なくて
六 狭田長田（さなだながた）に作る稲 中国米とむかしよりその名高きに改良を 加えて魚塩に富める国
七 海には汽船陸に汽車 運送交通便利にて 同じ日本帝国のうちにも多くはあらざらん
八 かかる幸福うくるわが 九十九万の同胞よ 君に国にと各の業（なり）をばはげみ勉めよや

第七　吉敷郡

一 郡界（ぐんざかい）なる鯖山を 下れば小鯖の禅昌寺 昔は西国の高野とて 今もその名ぞいと高き
二 音にきこえて鳴瀧の 泰雲寺にもたち寄りてくれば 氷上の橋近き 山手に見ゆる興隆寺
三 大内氏の氏寺と 栄えしかども名にも似ず 衰へ果てて本堂の 跡は山口農学校
四 御堀の里の外郎羹（ういろうこう） 名産なればあがなひて 鰐石見つつ鰐石橋 渡れば山口町ぞかし
五 山口はもと山口といふ豪族のすめりしを 大内弘世ほろぼして 基開きしあとどころ
六 九代の孫の義隆卿 防長豊筑芸備石 七ヶ国を管領し 西国一の大都会
七 その館址の古寺の 庭にのこれる豊後石 苔の筵の露ふみて 誰かむかしをしき忍ぶ
八 築山館のその跡は 築山八坂の社にて 夏のみ山と見し梢 海と見し池かたもなし
九 将軍足利義植の 滞在ありし御屋敷といふ地は 歩兵第四十二聯隊の兵営よ

※以下33番まであり